The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『デュランデ城』における風景描写のダイクシス（その２）
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『デュランデ城』における風景描写のダイクシス（その２）

瀧田恵巳

4.3. 用例の検討：風景描写と Hier/Origo 導入の整合性について

4.3 では，Eichendorff の作品の her-と hin-の用例における風景描写の割合と，各用法における Hier/Origo と her-及び hin-の示す方向との意味的整合性を検討する。

すでに 4.1 で述べたように，ここでいう風景描写とは，Alewyn(1957/1974)の指摘する二つの条件（①輝きや音響などを運動として表現する事例であること，②遠景から近景へ，または近景から遠景への広範囲にわたる状況を描写する事例であること）を満たす。

またここでは Hier/Origo を，Bühler(1934/1982)のいう指示場の中心「原点 Origo」に基づき，物語場面で出来事を経験する知覚主体とする。3 で述べたように Hier/Origo の規定は，Jahn(1937:61)，Alewyn(1957/1974)，Ehlich(1985)に由来する。これらによると，her-と hin-の用法は，その場面における知覚主体を前提とし，その知覚主体は，会話文であれば話し手，物語の地の文であれば場面の中心を担う登場人物に相当する。Hier/Origo に相当する知覚主体が her-の示す「話者への方向」の目標側及び hin-の示す「話者から離れる方向」の起点側に位置する場合，her-と hin-の意味にある「話者」として Hier/Origo を導入する整合性は高く，その目標ないし起点から逸脱するほど整合性は低下する。

結論を先取りすると，her-と hin-が関与する出来事は必ずしも風景描写ではなく，Hier/Origo の導入に高い整合性が認められる割合は比較的高いが，絶対的なものではない。また整合性の低い事例には Hier/Origo とは別の要素が介入している。

4.3.1. herab

herab の全四例には本論文でいう風景描写には該当するものはなく，(5)と(6)は人物の移動を，(7)と(8)は無意志的な動きを表す。これらの herab は全て分離前つづりで，(5)の herab に後続する zu mir は rechte Klammer に属する。(6)は zu 不定詞，(7)は dass に導かれる従属文内の定動詞，(8)は過去分詞の付加語的用法の事例である。さて，herab の表す下への方向において，Hier/Origo となる知覚主体は方向の目標側の下方に位置するだろうか。

(5)の会話文中の herab は，窓辺から窓の下にいる話し手への移動方向を表すため，方向の目標側に Hier/Origo が認められる。それに対して(6)は，登場人物「彼 ihm」が故郷にたどり着くまでの経過が語られる地の文で，herab は監禁されていた癲狂院から脱出する移動方向を表すが，ihm の移動に伴って場面も移行する。つまり ihm が場面の中心を担う知覚主体 Hier/Origo で，herab はいわば Hier/Origo の移動方向を表す。

(5)„Gabriele“, rief er nun lauter, „meine arme Gabriele, der Wind in der Nacht weint um dich an den Fenstern, ich liebte dich so sehr, ich lieb dich noch immer, um Gottes willen komm <u>herab</u> zu mir, [...].“ (SD:25)

「ガブリエレ」彼は声を高めた。「かわいそうなガブリエレ，窓辺を吹く夜の風も，おまえを思って泣いている。私はおまえを本当に愛していたよ。それは今も変らない。お願いだ，おいで，私のところへ下りておいで。（省略）」(201)

(6) So war es ihm gelungen, in einer dunklen Nacht mit Lebensgefahr sich an einem Seil herabzulassen und in der allgemeinen Verwirrung der Zeit unentdeckt aus der Stadt durch die Wälder, von Dorf zu Dorfe bettelnd, heimwärts zu gelangen. (SD:29)

彼は闇夜に生命からがら一本の綱にすがって脱出し，時世の混乱に乗じて，見咎められることなく市中をぬけ出した。それから森をさまよい, 村から村へと物乞いをしながら，やっと故郷に帰りつくことができたのである。(206)

次の静物の無意志的な動きを表す二例は，いずれも物語の地の文で中心的な登場人物に関わるが，その状況は複雑で，端的に Hier/Origo が方向の目標側にあると判断することはできない。(7)の herabrollte は「彼女 sie」の身繕いによって起こる巻き毛が落ちかかる動きを表し，herab の示す方向の目標は顔や肩という身体部分である。仮にこの身体部分にのみ Hier/Origo を導入し，herab は解かれた髪が落ちかかる際に知覚主体 sie の視界に入ってくる方向を表すと解釈してみよう。確かにこの解釈は sie の内的思考に移るその後の文脈にも合致する。しかしここでは巻き毛が顔や肩に落ちかかるにつれてクローズアップされてゆく sie の外的な様子も同時に描写されるため, sie からのみ見られた情景というわけでもない。つまり，この例は Hier/Origo が sie にあると示しつつ，なおかつそれが知覚主体としての Hier/Origo からのみ見られたものではないことを示している。それはつまり，herab の方向を知覚するはずの Hier/Origo=sie の外側に，この情景を描写する視点も同時に存在することを示している。(8)の herabgebrannt(e)は，燃えつきて短くなった蝋燭の状態を表すが，この蝋燭はその時点で er に向かって燃えてくるわけではなく，また er が蝋燭より下に位置するかどうかも定かではない。

(7) Sie wand ihre Haarflechten auf, dass ihr die Locken über Gesicht und Achseln herabrollten, und dachte vergeblich nach, wen ihr Bruder eigentlich im Sinn habe und warum er vor dem Pistol so sehr erschrocken – es war ihr alles wie im Traume. (SD:6)

彼女がお下げの三つ編みを解くと，豊かな捲き毛がくるくると顔や肩に落ちかかった。いったい兄さんは，あれが誰だと思っているのかしら，なぜ，あのピストルを見てあんなに驚いたんだろう，彼女は考えたが，わかるはずもなかった。―彼女にはすべてが夢の中の出来事のように思えるのだった。(180)

(8) Schauernd vor Frost stieg er die breite, dämmernde Treppe hinauf, zwei tief herabgebrannte Kerzen beleuchteten zweifelhaft das vergoldete Schnitzwerk des alten Saales, es war so still, dass er den Zeiger der Schlossuhr langsam fortrücken

und die Wetterfahnen im Winde sich drehen hörte. (SD:22)
寒さにふるえながら，彼は薄暗い階段をのぼって行った。今にも燃えつきそうな二本の蝋燭が，古びた広間の金箔の彫刻をぼんやりと照らしている。あまり静かなので，時計の針がゆっくりと進む音や，風見が風に回る音が聞こえるほどだ。(197-198)

以上のように herab の用例のうち，(5)は目標側に Hier/Origo に相当する知覚主体が存在するため，her-の示す方向における「話者」と Hier/Origo との間に高い整合性が認められるが，(6)についてはその整合性は極めて低く，(7)と(8)についてはどちらとも言い難い。

4.3.2. herunter

herunter の用例は次の一例のみで，話し手が相手に自分の方へ移動するよう指示する命令文中の分離動詞の前つづりである。(9)は，herunter の示す方向の行く先に話し手が位置することから，目標と Hier/Origo との間に極めて高い整合性が認められる。

(9) „Ich höre Waldhörner!“ rief hier plötzlich Gabriele; es verhielt ihr fast den Atem vor Erinnerung an die alte, schöne Zeit. – „Komm schnell herunter, mein Kind“, rief ihr die Priorin zu. (SD:16)
「角笛が聞こえるわ！」突然ガブリエレは叫んだ。楽しかった昔の思い出が胸につき上げて，息がとまりそうだった。―「さあさ，はやく下りておいで」尼僧院長は呼びかけた（省略）。(191)

4.3.3. herauf

herauf の全七例のうち風景描写を表すものは次の三例で，いずれも分離前綴りである。

(10) In solchen Gedanken stand er an einem der offenen Fenster, die Wälder rauschten so frisch herauf, das hatte er so lange nicht gehört, und im Tale schlugen die Vögel und jauchzten die Hirten von den Bergen, dazwischen hörte er unten im Schlossgarten singen: (SD:34)
こんなことを思いつつ，彼はあけはなった窓辺にもたれていた。森は爽やかにざわめきわたり，久しく忘れていた音をひびかせている。谷間では小鳥たちがうたい，山からは羊飼の喚声がひびく。それにまじって下の庭園から歌声が聞こえてきた。(210)

(11) – So war er in den Gartensaal gekommen. Die Tür stand offen, er trat in den Garten hinaus. Da schauerte ihn in der plötzlichen Kühle. Der untergehende Mond weilte noch zweifelnd am dunkeln Rand der Wälder, nur manchmal leuchtete der Strom noch herauf, [...] (SD:44)
－こうしてレナルトは庭むきの広間に下り，あけたままになっていた戸を通って，庭

園に歩み出た。突然の冷気に彼は思わず身ぶるいした。沈みぎわの月が，暗い森の端にまだおぼつかなくかかり，ときたま流れをきらきらと輝かせている。(221)

(12) Als der Tag anbrach, war der ganze Himmel gegen Morgen dunkelrot gefärbt; gegenüber aber stand das Gewitter bleifarben hinter den grauen Türmen des Schlosses Dürande, die Sterbeglocke ging in einzelnen, abgebrochenen Klängen über die stille Gegend, die fremd und wie verwandelt in der seltsamen Beleuchtung heraufblickte—[...]. (SD:33)

夜があけたとき，東の空は一面に深紅に染まり，一方デュランデ城の陰鬱な塔の彼方の空には，雷雲が鉛色にたれこめていた。とぎれとぎれの弔いの鐘がひっそりとした地の上にひびきわたり，あたりはこの異様な照明をうけて，変容してしまったかのようによそよそしく見えた。(省略) (210)

(10) と(11)では，方向の目標側に「er 彼」という知覚主体が存在し，森のざわめきや川の流れの輝きが「er 彼」に向けられ，「er 彼」が知覚した風景であることが描写されている。一方(12)は，老伯爵が死去した翌朝の城の場面で，herauf の示す方向の目標にいるはずの老伯爵は既に死去しており，この風景描写を知覚する存在ではない。後に紹介する(28)ではデュランデ城が擬人化されているが，(12)ではその点が判然としない。

風景描写以外の四例は，(13)のように犬が場面の中心人物に移動する方向を表すものが二例，話し手が正体不明の存在に命じる副詞の独立的用法(14)，そして上方の登場人物に向かう人物移動(15)で，いずれの場合も目標側に中心的な知覚主体が位置している。

(13) Währenddes hatte sein alter Hofhund sich gewaltsam vom Stricke losgerissen, sprang liebkosend an ihm herauf und umkreiste ihn in weiten Freudensprüngen; er herzte sich mit ihm wie mit einem alten treuen Freunde. (SD:30)

そのとき昔の番犬が綱をひきちぎって駆けてきて，甘えながら飛びかかり，彼のまわりを狂喜してはねまわった。なつかしい忠実な友を抱くように，彼はしっかりと愛犬を抱きしめた。(206-207)

(14) „[...] herauf, du unsichtbares Kriegsgespenst!“ (SD:22)

「(省略) 上がってこい，目に見えぬ戦いの亡霊よ！」(198)

(15) Da ließen sich auf einmal unten Stimmen vernehmen, drauf hörte man jemand eilig die Treppe heraufkommen, immer lauter und näher. „Ich muss herein!“ rief es endlich an der Saaltür, [...]. (SD:32)

そのとき突然，階下で人声がしたと思うと，誰かが急いで階段を駆け上がってきた。足音はしだいに大きく近づいてきて，とうとう広間の扉のところで「入れてくれ！」という叫び声がした。(省略) (208)

このように herauf に関しては，(12)を除く全ての例において方向の目標側に中心的な知覚主体が存在し，目標側への Hier/Origo の導入に高い整合性が認められる。

4.3.4. heraus

heraus の全六例はいずれも分離前綴りで，風景描写に該当する例は見られない。

次の人物の移動を表す二例では，Hier/Origo に相当する話し手や中心的な登場人物が heraus の表す方向の目標側に位置している。(16)の heraus は，屋内から間接話法の原話者「尼僧院長 Priorin」への方向を表す。(17)の heraus は「伯爵」を中心とする場面で用いられ，外の「伯爵 Graf」が自分たちの主人と気づいた農夫たちが出てくる方向を表す。

(16) Gabriele war schnell in das Haus gelaufen, dort wollte sie durch's Fenster nach dem Fremden sehn. Aber die Priorin rief ihr nach: Der Herr sei durstig, sie solle ihm Wein herausbringen. (SD:16)
ガブリエレはすばやく家のなかに逃げこみ，窓からこの見知らぬ騎士を見ようとしたが，尼僧院長に呼びもどされた。「この方は喉が乾いておいでなのだよ。葡萄酒を持ってきてさし上げなさい」(192)

(17) Im Dorfe aber war es wie ausgekehrt, die Bauern guckten scheu aus den Fenstern, sie hielten den Grafen für einen Herrn von der Nation. Als ihn aber nach und nach einige wiedererkannten, stürzte auf einmal alles heraus und umringte ihn, hungrig, zerlumpt und bettelnd. (SD:36)
村に来てみると，あたりに人影はなかった。農夫たちはみな，革命政府の人間が来たのだと思って，恐る恐る窓から覗いていたのだ。だがそのうち，何人かが伯爵に気づくと，人々は老いも若きもいっせいに家から走り出て，彼をとりかこんだ。飢えにやつれ，襤褸をまとい，物乞いの手をさしのべながら。(213)

他の四例は，移動以外の動作・行為を表す。また Hier/Origo に相当する知覚主体は，(18)のみ目標側に位置づけられるが，それ以外は起点側に位置する。(18)の Herausforderung「挑戦」は，中心人物 er が相手に出てくるように要請することから転じたと解釈すれば，er は目標側にあると見なされる。それに対して(19)の heraussehen は話し手が外を見る動作の方向を表すため，話し手は当然見る動作の起点側にいる。(20)の heraussagen（文中では zu 不定詞）は中心人物 Renald 自身の発言行為を表し，Hier/Origo に相当するこの中心人物は起点側に位置づけられる。会話文(21)の herausgeben もまた，話し手が相手に譲渡する行為を表すため，Hier/Origo は起点側にある。

(18) Da pocht' es wirklich an der Tür. Er lachte, dass der Geist die Herausforderung so schnell angenommen. In keckem Übermut rief er: „Herein!“ (SD:22)

するとそのとき，本当に戸をたたく者があった。亡霊がこんなにもすばやく挑戦に応じたのかと，彼は笑い，傲然と叫んだ。「入れ！」(198)

(19) „Wie du auch so allein im Dunkeln durch den Wald gehen kannst“, sagte Renate wieder; „ich stürbe vor Furcht. Wenn ich so manchmal durch die Scheiben heraussehe in die tiefe Nacht, dann ist mir immer so wohl und sicher in meiner Zelle wie unterm Mantel der Mutter Gottes.“ (SD:10-11)

「あなたなら，こんな暗闇のなかを，ひとりぼっちで，森をぬけて行けるでしょうけれど」とレナーテは言った。「私なら恐ろしくて死んでしまうわ。窓ガラスごしに深い夜の闇をながめるとね，私はいつも，この庵室のなかにいることが，マリアさまのマントにくるまれているように，とてもありがたく，心強く感じられるのよ」(184-185)

(20) Endlich wurde er in des Grafen Garderobe geführt, der alte Herr ließ sich soeben frisieren und gähnte unaufhörlich. Renald bat nun ehrerbietig um kurzen Urlaub zu einer Reise nach Paris. Auf die Frage des Grafen, was er dort wolle, entgegnete er verwirrt: Seine Schwester sei dort bei einem weitläuftigen Verwandten – er schämte sich herauszusagen, was er dachte. (SD:18-19)

やっとのことでレナルトは伯爵の化粧部屋に通されたが，老伯爵はちょうど髪にウェーブをかけさせながら，ひっきりなしに欠伸をしているところだった。レナルトはうやうやしく，巴里へ行くための休暇を願い出た。何をしに行くのかと問われると，彼は狼狽して答えた。「妹が当地の遠い親戚の家に滞在しておるのでございます」―彼は自分の考えを口にすることを恥じたのである。(194)

(21) „Wollen sie mir drohen, mich schrecken?“ – Und rasch zu Renald gewandt, rief er: „Und wenn ich deine ganze Sippschaft hätt’, ich gäb’ sie nicht heraus! [...]“ (SD:24)

「俺を脅迫するのか，この俺を怖気づかそうというのか！」―そしてさっとレナルトの方を向くと叫んだ。「もし仮におまえの一族を全部ここに隠していたとしても，俺はわたさぬぞ！（省略）」(199)

以上のように heraus には風景描写は見られない。また，人物移動を表す二例及び挑戦を表す例には方向の目標側に Hier/Origo の存在が認められるが，見る行為，発言行為，譲渡を表す計三例における Hier/Origo は起点側にあり，目標との整合性は極めて低い。

4.3.5. herein

herein の全七例には，銃弾の向かう方向を表すものが一例，人物の移動を表すものが五例ある。そして物語冒頭部分の一例は一般的に風景描写とも見なされるが，輝きや音響の運動ではないため本論文の風景描写から除外される。次の(22)の分離前つづりの herein が表す銃弾の移動方向は，場面の中心人物（Hier/Origo）である伯爵を目標とする。それは，

伯爵が銃撃されたことを伝える後の文脈に効果的に結び付けられている。

(22) Da pfiff plötzlich eine Kugel durch das Fenster herein. „Das war der Renald!“ rief der Graf, sich nach der Brust greifend; er fühlte den Tod im Herzen. (SD:42)
そのとき，不意にうなりをあげて窓から銃弾が飛びこんだ。「レナルトだな！」伯爵は胸をつかんで叫び，心臓に死を感じた。(219)

人物の移動方向を表す五例は，地の文が一例，会話文三例，間接話法一例である。地の文の(23)の分離前綴り herein が表す方向の目標である広間には，場面の中心的存在「尼僧院長 Priorin」がいることから，目標側に Hier/Origo に相当する知覚主体が認められる。一方会話及び間接話法の四例のうち，herein が Hier/Origo の位置する内部空間への方向を表すものは，話し手のいる室内への方向を表す(24)の副詞的用法のみである。(25)と(26)の分離前綴り herein は，共に城の屋上から見た城の建物内への移動方向を表す。(25)では，話し手である猟師がこの移動を建物の外から知覚するため，Hier/Origo が目標側にあるとはいえない。この場面に続く(26)でも同様に，herein が含まれる間接話法の文の原話者は建物の外の中庭にいるが，herein はおそらく屋内への移動方向を表す。つまり(25)と(26)において，話し手は心的には建物内部にあるかもしれないが，知覚主体としては建物の外にいる。さらに(27)の会話文では話し手は部屋の外に位置し，herein は相手のいる室内への方向を表すことから，話し手の位置と方向の目標は明らかに対立する。

(23) Die Priorin aber ließ die Kinder hereinkommen, die scheu und neugierig in dem Saal umherschauten, in den sie das ganze Jahr über nur manchmal heimlich durch die Ritzen der verschlossenen Fensterladen geguckt hatten. (SD:15)
さて，尼僧院長は子供たちを広間に招きいれる。子供たちは，一年の間ほんのときおり，鎖された鎧戸の隙間から盗み見るだけだった部屋のなかを，おずおずと，ものめずらしげにながめまわす。(189)

(24) [=(18)]Da pocht’ es wirklich an der Tür. Er lachte, dass der Geist die Herausforderung so schnell angenommen. In keckem Übermut rief er: „Herein!“ (SD:22)
するとそのとき，本当に戸をたたく者があった。亡霊がこんなにもすばやく挑戦に応じたのかと，彼は笑い，傲然と叫んだ。「入れ！」(198)

(25) Der Jäger sah ihn erstaunt an. „Ich kann auch nichts mehr sehen“, sagte er dann halb unwillig und warf sich nun auf die Mauer nieder, über den Rand hinausschauend: „Wahrhaftig, dort an der Gartenecke ist noch ein Fenster offen, der Wind klappt mit den Laden, dort ist’s hereingehuscht.“ (SD:39)

猟師はあっけにとられて彼を見つめた。「もう何も見えませんよ」猟師は少し気を悪くして言ったが，今度は城壁の上に身を伏せ，そこからのり出すようにして外を見ると，叫んだ。「なるほど，あの庭の隅の窓がひとつあいたままだ。風で鎧戸がばたばたしているぞ。あそこにもぐりこんだんだな」（216）

(26) Die Zunächststehenden im Hofe wollten eben nach der bezeichneten Stelle hineilen, als plötzlich mehrere Diener wie Herbstblätter im Sturm über den Hof daherflogen. Die Rebellen, hieß es, hätten im Seitenflügel eine Pforte gesprengt, andere meinten, der rotköpfige Waldwärter habe sie mit Hilfe eines Nachschlüssels heimlich durch das Kellergeschoss hereingeführt. (SD:39)
それを聞いた者たちがそちらへ駆けつけようとしたとき，突然，嵐に舞う秋の落葉のように，数人の家来がばらばらと中庭に駆けこんできた。暴徒が側翼の入り口を突破した，と言う者もあり，赤毛の森番が合鍵を使って地下室からひそかに暴徒をひきいれたのだ，と言う者もあった。（216）

(27) [=(15)] Da ließen sich auf einmal unten Stimmen vernehmen, drauf hörte man jemand eilig die Treppe heraufkommen, immer lauter und näher. „Ich muss herein!“ rief es endlich an der Saaltür, [...]. (SD:32)
そのとき突然，階下で人声がしたと思うと，誰かが急いで階段を駆け上がってきた。足音はしだいに大きく近づいてきて，とうとう広間の扉のところで「入れてくれ！」という叫び声がした。（省略）（208）

次の物語冒頭部分の分離前つづり herein は，擬人化された「（デュランデ古城の）廃墟 Trümmer」が「寂寥 Einsamkeit」の中を見る方向を表す。それ以外に登場人物と呼べる存在はこの時点でまだ出現していないため, 方向の目標側には Hier/Origo となる存在は無い。従って目標側に Hier/Origo を導入することは難しい。しかし，その後以前谷間に住んでいた中心人物が紹介されるので，この herein には伏線としての機能は認められる。

(28) In der schönen Provence liegt ein Tal zwischen waldigen Bergen, die Trümmer des alten Schlosses Dürande sehen über die Wipfel in die Einsamkeit herein; von der andern Seite erblickt man weit unten die Türme der Stadt Marseille; wenn die Luft von Mittag kommt, klingen bei klarem Wetter die Glocken herüber, sonst hört man nichts von der Welt. (SD:3)
美しいプロヴァンス地方の緑ふかい山々にかこまれて，ひっそりとした谷間がある。そこからふり仰ぐと，木々の梢をこえた高みに，デュランデ古城の廃墟がじっとこちらを見下ろしており，目を転じてはるか下方を見晴らせば，遠くにマルセイユの町の尖塔がかすんでいる。澄みきった日には，南風にのって鐘の音がひびいてくることもあるが，そのほかには，世間の物音は何一つここに届くことはない。(176)

このように herein については，まず最初の六例に関しては，その目標側に Hier/Origo に相当する知覚主体が認められる例は三例あるが，残り三例については困難である。さらに風景描写に類する例が一例見られるものの，目標側に Hier/Origo の存在は認められない。

ところで(28)について Ehlich(1985:253)は，この herein が物語場面に読者の Origo を導入する機能を果たすとし，次のように説明している。そこでは herein の示す方向の目標側に読者の Origo があるものとされ，読者が寂寥であると解釈される。

(29) Die Trümmer »sehen herein«; indem Eichendorff so schreibt, gibt er dem Leser einen Platz in der Geschichte, sein Hier: die Origo des Lesers ist die Einsamkeit. (Ehlich1985:253)
廃墟が「こちら（の中を）見る」，Eichendorff がこのように書くことにより，読者にその物語の中の居場所を与えるのである。それは，読者にとっての「ここ」である。つまり読者の Origo が寂寥なのである。

Ehlich(1985)の見解によると，読者の Origo がそのまま物語場面の Origo となる。確かに読者は物語の中心人物の立場から物語場面を把握するが，物語場面の Origo と読者の Origo は，そもそも次元が異なる。この点についてさらに説明を加えておきたい。

まず厳密にいえば，作者と読者の次元は，語り手と聴き手の次元から区別される。作者と語り手の区別については，バルト(1979:38-39)が「語り手と登場人物は本質的に《紙の存在》である。ある物語の（生身の）作者は，その物語の語り手といかなる点でも混同しえない」と明言している。読者に対する「聴き手」という語はジュネット(1985:305)に由来し，読者に帰属し語り手と同じ物語水準を占める架空の存在を指す。瀧田(2014:92)はこの読者と聴き手の関係について，「まず正に執筆している作者にとって，誰が読者となるかは不明である。従って語り手は架空の相手を想定する。一方，読者は現実世界において物語を読み，物語世界に触れるとき，現実にとらわれず架空の出来事を受け入れる精神的存在へと変容する」と補足し，架空の出来事を受け入れる精神的存在を「聴き手」とする。さらに瀧田(2014:92-93)は，「作者が物語を書く現実の時空と，読者が物語を読む現実の時空の間には，決して埋まることのない隔たりがある」のに対して，「物語の時空においては，語り手は作者が執筆する時点において聴き手に語りかけ，聴き手は読者が読む時点において語り手の語りを受信する」と述べ，語り手と聴き手はフィクション世界の時空を共有するが，作者と読者の間には現実世界の時空の隔たりがあることも合わせて指摘する。

物語次元における知覚主体としての Hier/Origo は，西郷(1975:73-80, 341)の提唱する「視点人物」，即ち視点を設定された人物に相当する。物語の語り手と聴き手は，当然のことながら登場人物となることはできず，その物語状況に居合わせることもできない。故に語り手と聴き手は視点人物を自らの視点のよりどころとして，物語状況に関わっていく。

物語状況に関わる際ダイクシス表現は重要な役割を果たすと Ehlich(1985)は指摘している。この指摘には本論文著者も大いに賛同するところであるが，問題は Erlich(1985)のいう読者の Origo が聴き手の視点だという点にある。

her-の目標と Hier/Origo との整合性が低いものとしては，他に herab の(6)～(8), herauf の(12)，heraus の(18)～(21)も挙げられる。この場合，構成要素 her の表す「話者への方向」の「話者」とはいったい何を指すのだろうか。これこそが Ehlich(1985)の指摘する読者の Origo であり，本論文では聴き手の視点，さらに広く視点と呼ばれるべきものであると考える。以後「視点」についても具体例に基づき検証する。

参考文献

Alewyn, Richard **(1957/1974)**: Eine Landschaft Eichendorffs. In: Alewyn, Richard: Probleme und Gestalten: Essays, Insel Verlag, Frankfurt am Main 1974, S.203-231. (Erstdruck: Euphorion 51, 1957, 42-60) (渡辺洋子訳「アイヒェンドルフの風景」『ドイツ・ロマン派論考』1984 年, 303-340)

バルト，ロラン (1979)（花輪光訳）:『物語の構造分析』みすず書房.

Bühler, Karl **(1934/1982)**: Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982 (Nachdruck von 1934).（脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳『言語理論　言語の叙述機能　上巻』クロノス，1983.）

Ehlich, Konrad **(1985)**: Literarische Landschaft und deiktische Prezedur: Eichendorff, in : Schweizer, Harro (Hg.): Sprache und Raum. Psychologische und linguistische Aspekte der Aneignung und Verarbeitung von Räumlichkeit. Ein Arbeitsbuch für das Lehren von Forschung, Metzler, Stuttgart, 246-261.

ジュネット，ジェラール(1985)（花輪光・和泉涼一訳）:『物語のディスクール』，水声社.

Jahn, Gisela **(1937)** : Studien zu Eichendorffs Prosastil (Palaestra Bd.204), Mayer & Müller, Leipzig.

西郷竹彦 **(1975)** :『西郷竹彦文芸教育著作集　第 17 巻　文芸学講座（Ⅰ）視点・形象・構造』明治図書.

瀧田恵巳**(2014)** :「ダイクシスから見た物語構造」,『言語文化研究 40 号』大阪大学大学院言語文化研究科，83-104.

例文出典

Eichendorff, Joseph von: Das Schloss Dürande,Philipp Recalm jun.Verlag, Stuttgart, 2011.（初版　1837 年）［略号 **SD**］（渡辺洋子訳「デュランデ城」　前田道介編『アイヒェンドルフ（ドイツ・ロマン派全集第六巻）』国書刊行会，1983，175-228.）